

火星



平成18年 7月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

緑さすびりケン像の足の裏

頓に言ふ愛染さんの暑さかな

文机の裏へまはりし天道虫

藺座布団すばやく重ねゆける音

木天蓼の風のまぶしき夏越かな

大祓了りし水に日ののりて

数珠を揉む音に流るる水馬

缶を蹴る音の過ぎゆく昼寝覚

夕映えを待ちて舟虫つるみけり

水の辺にいまごろ咲いて紅蜀葵

太白星

柳生千枝子

五月雨や父の遺墨を眺めをり
螢来よ幼ナの肩に来て止まれ
螢明滅髪なびかせる乙女子に
大方は故人甘酒好きなりし
眼を閉ぢて甘酒すする老いたるよ
夏茜曾て燃えたる富士の影
夏の火を永遠にして火星燃ゆ

杉浦典子

花辛夷までランドセル持たさるる
亀鳴くや大道芸は火を吐いて

接木せし父が眼鏡を探しをり
花冷のてのひらを当つコルクの木
春鰯焼くサッカーの勝つてをり
悪いけどお遍路さんを抜きにけり
青葉木菟この世に母の骨置かれ

浜口高子

桜の夜たつぷり水を飲みにけり
春の風邪ひらたき嘴の鳴りにけり
ひと鳴きのあとの風なり初蛙
亀の鳴く築地に真砂女探しぬる
牛蛙 腓 返りの足引きつ
春禽や稚児の烏帽子のづれぬたり
時雨亭の奥に傘亭亀の鳴く

火星作品

山尾玉藻選

みる 筥の庭師の湯呑牡丹の芽 神戸 深澤 鱻
寺 寺を放ちて花の吉野なり
一 木の桜いちにち了りけりり
指 笛のさくら祭に紛れをり
花 びらをひとねぶりせり桜守
狛 銃の筒先の向く芽吹山 八幡 大山 文子
黒 文字の花やいつしかけもの道
洛 中の空の重たき雲雀かな
鳥 の巢の下のポストに用あり
護 摩跡の形ありたる初桜
小 手毬の花に蹄鉄はづさるる 宝塚 山田美恵子
風 船売糸結はへては空に置く
花 人の餉ついでる竹の箸

春の田や胴震ひして月上がる
階にぼんぼり寝かす花の雨
湯上りのマツトに踏みぬ花の冷
一握りの蕨置かるる柁かな
風紋の砂奔りだす松の芯
鶏の眼にほむらつめたき遠山火
遠山火母のたもとを握りしめ
御開帳帽子のしづくたたみけり
片足は水踏んでをり孕鹿
菜が咲いて母の鏡台開いてあり
はんざきの向き変はりぬし遅ざくら
天上に生れしひばりの落ちて来し
亀鳴くや水に灯をおく通天閣
蝌蚪の水ポストの前にこぼれけり
観潮船きふに左舷の傾ぎたる
七曜の雨をたくはへ牡丹の芽
堅香子の花のまはりの昏かりし

姫路松たかし

大和郡山 城 孝子

明石 戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

一木の桜いちにち了りけり 深澤 鱧

この時季にだけ一本の桜が見えるのである。一日の移ろいには、照り陰りもあり、ちらほらとも散り、ある刻には激しい落花ともなる。上五「一本の」でなく「一木の」が良い。桜そのものの存在感が「一木」にはある。作者と桜の一体感が窺え、互いに一日分の老いが感じられる。秀句である。

鳥の巢の下のポストに用のあり 大山 文字

このポストは自宅から近く、いつも利用しているポストであろう。偶々、そのポストを覆う木の上に鳥の巢を見つけたのである。恐らく孵化した鳥の囀りから気が付いたのであろう。平凡な日常生活の中のちよつとした楽しみである。

風船売糸結はへては空に置く 山田美恵子

ボンベから風船にガスを入れ、手際良く糸で結わえては、風船を放しているのである。この句の眼目は「空に置く」である。放した風船が糸の長さまで勢いよく昇り、急に糸がぴんと張った状態になる。風船売のその動作が「空に置く」である。赤、青、黄などの色風船が風に吹かれる様は美しい。

沈丁や向う三軒雨しづく 丸山 照子

沈丁は匂いの花という印象が強いが、意外に雨とのモンタージュも合う花である。「向う三軒」などという慣用語が反対に良い働きをしている。季語の本意がこの句にはある。

遠山も小学校も桜かな 堀 志皋

実景から甦った郷愁の句であらう。桜の美しさも然ることながら、桜は入学、卒業という一大行事の季節の花でもある。「遠山も小学校も」の「も」の並列が懐かしさを増幅させる。

目覚むるに間ある祇園の春の水 高橋 芳子

この「春の水」は白川であらう。一般人にとつて祇園は非日常の世界である。夜遅くまで眠らない場所である。「目覚むるに間ある」はそういう作者の思いと共に、実際、昼間は動きの少ないところである。「春の水」という季語を、消極的にちよつとずらしたところで成功している。

花びらの水のかたちに残りけり 土屋 酔月

この句は省略過剰気味である。選者の解釈は好意的かも知れない。掲句の「水のかたち」を雨あとなどの「潦」と解釈した。乾いてゆくに従つて花びらが潦の形に残つたのである。そう解釈すれば写生の句として成功している。

恒星圈

金澤 明子

カステラの菜の花いろに更けにけり
沈丁花星の光に触るるとき
一ひらは衿に戻りて花冷ゆる
チューリップうねりて紅の花まるぶ
JRの事故一周忌花万朶

木野本加寿江

桃の花日暮の色となりぬたり
鳶の笛家より外の暖かし
花冷の一気に飲みし朝の水
点滴の耳に流れるさくらさくら
花芯より蛇の飛び出す昼さがり

城 孝子

土筆摘み地のぬくみを摘みにけり
さくらさくら魚のはらわた抜きをれば
桜見てその空を見てもどりけり
霾れるバスの中なるシャンデリア
水飲んでゐる蝶々に脚ありぬ

大東由美子

目借時チューインガムの破裂せる
眼帯の母に十葉咲きぬたり
春の風邪鼻濁音てふがぎぐげご
霊柩車先立ててゐる百千鳥
花を見る笑ひ上戸と泣き上戸

獅子座

山尾玉藻推薦

松山直美

どこまでが湖か陸地か葦の角
花屑を拵げてゐたる鴨の数
糸桜くぐりて見れば幹のあり
井戸蓋に桜蔭降る日となれり

大城戸みさ子

手作りのきらずを提げて夕桜
囀や志ば漬の樽あぶくせる
花の冷パスタの席の一つ空き
すし桶の籠はづれさう木の芽風

西畑敦子

墓塚も陵もまた花の雨
馬塚のやさしき高さ豆の花
馬塚にならびひと畝葱坊主
桜しべ降る玉乗りのピエロかな

根本ひろ子

遠来の人待ちゐたる春霞
嬰の香の胸に残れる養花天
水かさの増えし堤の夕桜
鮎つまむ塗桶にある葉包紙

助口弘子

幔幕の内より呼ばる花見かな
砂饅頭に烏のゑんどうのせてあり
花冷の鏡の中の顔ふたつ
東寺の塔正面に見て種物屋

坂口夫佐子

修学院の小草にかわく春の泥
干されあるセール雫す春の蟬
雲切れて日矢の先なる桜貝
貝つけて浜辺にかわく若布かな

中上照代

点滴の落つる早さよ四月尽
歩行器をゆつくりと押し春惜しむ
水温む家鴨と鴨と行き交うて
錦鯉浮くも沈むも水温む